

序論 「脱／文脈化」を思考する

大杉 高司

This is my starting point:
no meaning can be determined out of context,
but no context permits saturation.

[Derrida 1979 : 81]

I デリダに倣う：「不真面目」の救出

『文脈のジレンマ』でベナミ・シャーフスタインは、「文脈の問題は、哲学者にとって、また他の誰にとっても、難解すぎて解くことのできない問い」[Scharfstein 1989 : 4] だという。哲学者でさえ持て余す問いに、門外漢が手をつけては火傷をするのがおちに違いない。しかし、諸学の先陣を切ってこの問いに取り組む哲学から難問の難問たる所以を学ぼうとするこの向う見ずさに、理由がないわけではない。人文・社会の諸学は、研究対象がなんであれ、「対象を正しく文脈に位置付けよ」との号令を弛むことなく自らに差し向けてきた。対象の「脱」文脈化は、つねに先行する学説や方法論が陥ってきた悪癖であり、より微細な文脈、より広範な文脈への位置付けを唱えては、わが学説わが方法論の優位を勝ち誇ってきた。それでは、文脈とはいかなる事態なのだろうか。この問いは、そのときどきの具体的な研究目的からかけ離れた、過度にメタな議論として捨て置かれるのが常である。なるほど仮にこの問いがメタな問いだとして、何に対して、何との関係でメタといえるのだろうか。文脈は、研究者の目前に、具体的対象性を備えてまさに地べたの如く広がっているはずではなかったのか。かくして私たちの多くは、文脈が何であるのかを知らずして「文脈化せよ」との掛け声を張りあげ続けるのである。

文脈をめぐる哲学的思考の幅と奥行きを視野におさめることは、もちろん筆者の能力を大幅に超えている。ここで簡単にとりあげるのは、冒頭にその言葉を引用したジャック・デリダの「署名 出来事 コンテキスト」[2002 [1972]]での議論である。デリダはこの短い論考で、彼の思想の中核概念のひとつ「反復可能性」について、簡潔かつ挑発的にまとめている。彼にとって反復可能性は、言語記号を含むあらゆる記号の可能性の条件だった。それは、いかなる記号も、それが記号として意味をもつためには、ただ一度だけ特定の瞬間にしか使用できないものであってはならず、必ず異なる使用を通じてその記号であると同定=再認されなければならないからだ。同時に彼は、そこに独特の捻りを加え、この記号の同一性の条件たる反復可能性が、その同一性の不可能性の条件でもあるという。というのは、どんな記号も、その反復的使用によって所与の文脈からたもとを分かち、潜在的には無限に異なる文脈で引用され、新しい解釈を引き寄せるからだ。そして、この記号が記号たるための根源的性質は、話し言葉（パロール）にも同様にあてはまるとして、批判の矛先を言語行為論のジョン・オースチンに向ける。

知られるようにオースチンは、日常的言語使用における事実確認的発話と行為遂行的発話とを区別し、後者の行為遂行的発話——たとえば、聖職者の「汝らを夫婦とする」との発話——に、

宣言、勧告、約束といった行為としての力を見出していた。デリダはオースチンの業績を彼には珍しく高く評価しながらも、オースチンが研究の初発で分析対象となる発話から「不真面目」な発話を排除している点を鋭く批判する。デリダはオースチンの『言語と行為』から、たとえば次のような件を引用する。

ある種の行為遂行的〔邦訳ではパフォーマティヴ〕な発言は、たとえば、舞台の上で役者によって語られたり、詩のなかで用いられたり、独り言のなかで述べられたりしているときに、独特の仕方で、実質のないものとなったり、あるいは、無効なものとなったりするというようなこと〔が〕ある。…〔中略〕…そのような状況において言語は、特別な仕方——すなわち、それとわかるような仕方——で、真面目にではなく、しかし正常な用法に寄生する仕方で使用されている。この種の仕方は、言語退化の理論というべきものの範囲のなかで扱われるべき種類のものであろう。われわれは、これらのすべてを一応考察の対象から排除する。われわれのいう行為遂行的〔パフォーマティヴ〕な発言とは、それが適切なものであれ不適切なものであれ、すべて通常状況でおこなわれたものであると理解することにしたい。

[デリダ 2002 [1972] : 41-42]

舞台上で聖職者を演じる役者の宣言は、宣言としての力を発揮しない、それは役者の台詞が婚姻を成立させようとする「真面目」な発話ではなく、神父や牧師の「真面目」な発話を真似たものにすぎないからだ、オースチンは考える。しかし、話し言葉を含むあらゆる記号の作用から、主体の現前すなわち書き手や話し手の意図や志向性を脱中心化しようとするデリダにとって、これは受け入れられる前提ではない。「真面目さ」の基準設定は、主体の意図や志向性を、まさに発話の力の起源に据えようとすることに違いない。ところがデリダから見れば、役者が舞台上で婚姻の宣言を反復＝引用できるのは、舞台の外のさまざまな状況下で、同じ発話が反復＝引用されてきたからであり、その点で両者はかわらない。反復可能な手続きあるいは方式という記号が記号であるための条件の観点からみれば、成功した「真面目」な発話はすべからず「不純」である。しかも、そもそもデリダがオースチンを持ち上げていたのは、彼の行為遂行的発話論が事実確認的発話を中心に据えた哲学的思惟がつねに回帰してきた真／偽対立の問題系から離脱しようとしているからだ。にもかかわらず、「真面目／不真面目」と装いを変えて序列的対立を再導入し、「通常」の発話から「寄生」や「退化」を排除することに、デリダは形而上学的二項対立のアポリアをみるのだった。

たしかに常識的観点からすれば、デリダによるオースチンの脱構築はアクロバティックな曲芸にみえる。ジョン・サールはデリダを批判して、オースチンは「約束するとはどういうことであるのか、陳述を行うとはどういうことであるかということを知ろうとする限り」で、役者の発話や小説の登場人物の陳述から「考察を始めるべきではない」と言っているに過ぎないという。つまり、デリダがいかに大げさに「形而上学的な排除」と揶揄した研究対象の境界付けは、「どのような方針で検討をすすめるか」という研究上の便宜ないし手続きに過ぎないというのだ〔サール 1988 [1977] : 79〕。なるほど、オースチンの言語行為論は、彼が舞台や小説のなかの発話の分析から出発していたなら、私たちが決して手にすることができなかった成果に違いない。これ

は、研究目的に応じて、学問がどのような文脈設定をするのかという、私たち自身もまた避けることのできない問いである〔本論集の前田論文、井川論文、深澤論文、浜田論文、大杉論文参照〕。しかし、学問による文脈化から、その学問が眼差す対象世界が編みあげる文脈へ関心をうつす時、デリダの議論が単なる曲芸として捨て置くことができない難題を浮き彫りにしていることが判明する。まずはこの点を、しっかりと確認しておきたい。

デリダの論考は、脱／文脈を思考しようとする私たちに何を教えているだろうか。彼にとって、あらゆる記号の意味や作用は、文脈に依存している。ここまでは、私たちの常識と合致する。重要なのは、舞台や詩の文脈と日常生活のさまざまな文脈は、記号の意味と作用を規定するという点で同じ水準で考えなければならない、ということだった。ところが、この観点から、デリダがオースチンから引きうけて用いた舞台や詩の事例は、人を欺きかねないところがある。というのは、舞台や詩、小説は、日常の文脈を考えるとときの比喻としては、やや不適切な点があるからだ〔ただし井川論文参照〕。舞台、詩、小説の文脈は、劇場や印字された紙（今日ではPCや携帯端末の画面）といった物理的な枠づけとして私たちに与えられている。しかし、あらゆる文脈が、物理的な枠づけとして直ちにそれと了解可能なモノとして与えられているわけではない。ふたたび「汝らを夫婦とする」との発話を考えてみよう。デリダを援護するジョナサン・カラーが例示してみせるように、この発話が「真面目」な発話として二人の人間を結び付ける行為を演じおおせるためには、いくつもの条件付けが要請される。教会という物理的セッティングはもちろんのことだが、加えて、話者の資格の有無、話者が話しかける二人の婚姻上の地位（既婚か未婚か）、おなじく二人が話者に先だって適切な文言を発していたかなどの諸条件などが、ともに互いに支えあって発話の文脈を形作る。しかも、この文脈のやっかいなところは、文脈がいかに定式化されたとしても、それを批判しようとするれば、言語的、非言語的を問わずいくらかでも欠けている要素を付け加えていくことができるということだ。たとえば、二人のうちどちらかが催眠術にかかっていなかったかどうか、あるいは、儀礼がリハーサルと呼ばれていなかったかどうか、等々〔カラー2009:195-196〕。さらに私たちは、新郎側の誰かが神父に拳銃を突きつけていなかったかどうか、その教会が宗教法人に婚姻を成立させる権能をあたえていない社会（たとえば日本）に所在しているのではないのかなど、ミクロにもマクロにも終わりなく付け加えていくことができる。つまり文脈は、多くの場合、常にそれとして特定できる枠づけであるというよりは、伸縮自在の可変性をもっているのだ。

これは決してありそうもない思考実験などではない。儀礼の分析を得意としてきた人類学にとって、儀礼執行者のどんな発話の効力もそれを取り囲む数え切れないほどの要素に依存していることは、周知の事実である。しかも、要素の数え上げと、それに対する数々の疑義は、けっして第三者たる観察者にとっての関心事にとどまらない。たとえば治療儀礼の施術師が、はたしてホンモノの施術師といえるのだろうか、呪薬は適切に準備されたのか、供犠獣は適当な動物だったといえるのかどうか、この時期にこの場所で儀礼をするのは妥当なのか等々は、儀礼に参加する誰もが口にする問い、つまり彼らの主要関心事のひとつでさえある〔比較参照として丹羽論文〕。もちろん、参加者にとっての最大の関心事が、儀礼そのものの実践的な目的の達成——治療であれ、婚姻であれ、幸運を呼び込むことであれ——であることには異論の余地はない。しかし、この目的達成への拘りこそが、その成否を左右する文脈諸要素への強い関心を人々に喚起しつづける。この意味で、文脈探索——文脈を構成する要素の数え上げと、そのひとつひとつへの疑義

——は、例外的というよりも、むしろ儀礼の「通常状態」であるといえる。

人類学者の古典的な研究対象が、なお一般読者にとって非標準的な事例、つまりは「通常の状態」では「ない」とするならば、儀礼という枠組みを取り払ってみるならどうだろう。アーヴィン・ゴッフマンがそうしたように、儀礼という枠組み設定を日常性全般に引き延ばすという手法をとっても良い [ゴッフマン 1986]。いずれにせよ、事態はかえって複雑になる。私たちは、伸縮自在で決して「飽和しない」日常的文脈のなかで、何を手掛かりにして、人の発話に約束や警告、愛の告白や政治的抵抗といった多様な力、つまり行為としての遂行性を読み取ることができるのだろうか。よく知る相方の何気ない一言を取り違えてひどい目にあうことなど、日常茶飯事のはずである。さらに、いっそのこと、発話や言語記号という研究都合上の制約＝枠づけを取り払ったら、どうだろう。私たちは、人のさまざまな行動や活動に、一体どのような枠組み設定をしたうえで、どんな意味や効果を読み取るのだろうか。一般に娯楽や芸能とされる活動に政治的抵抗の意味や効果を読み取るのは、文化研究の十八番として良く知られる。しかし、そう確定されるために、どのような文脈要素が動員され、なにか排除＝無関連化され、そしてそれは誰によってどんな権利でなされるのだろうか。いや、それよりも、そもそも「娯楽／芸能」や「政治的抵抗」という枠組みは、どんな構成要素から成り立っているのだろうか [政治性については大河内論文参照]。さらに思い切って枠組みをとりはらい、制度や知識、機械などの人工物の振る舞いに、あるいは無機物と有機物からなる自然の営みに視野を広げてみてはどうだろうか [浜田論文、武村論文、大杉論文参照]。私たちが、それら振る舞いや営みに意味や作用を読み取るとき、いったいどんな文脈を数え上げ、考慮にいれるならば、妥当な読み取りと受け取られるのだろうか [妥当性については、井頭論文参照]。

かくしてオースチンの目論見とは反対に、「不真面目」な枠組みの外へと出立し「通常の状態」を希求すればするほど、私たちは文脈の無際限の広がり眩暈し、意味や力の不確定性に直面させられることになるのである。

II デリダに抗う：「真面目」への再接近

デリダは、先の論考の最後に自身の署名の複製を付している。この複製された署名は、書かれた言葉にとっての署名が、話し言葉にとっての「語る主体」の現前に相当するとしたオースチンを揶揄して、意味確定の拠点のはずの当の署名もまた反復複製されうるものだからこそ署名たりえていることを、実演してみせたものだった。デリダの解説者たちはそう語る。またしても、「署名の同一性は模造＝偽造可能性としての反復可能性によって構成される」 [高橋 1998 : 163] である。しかし、デリダは、どこまで「真面目」に自分自身の署名をそこに複製したのだろうか。デリダの「内面」を掘り散らかさなくとも、デリダに倣って文脈を探索していけば、ある程度の答えはでていけるといえるだろう。彼にとって、自身の論考の無際限の誤読は受け容れ難いものだったはずだ。すくなくとも、サールの批判論文に対してデリダが長大な反批判論文「有限責任会社 abc…」 [デリダ 2002 [1977]] を執筆したという事実、そしてその結果『有限責任会社』 [2002 [1990]] という題目の書籍が編まれたという文脈が、そういう読みを私たちに促している。また、デリダ流脱構築の散種が、デリダという灯台にまったく方向づけられない類のものだったなら、脱構築派のケラーもサールの批判を「なんとも見事な誤解」 [カラー 2009 : 180] などと言えなかっただ

ろう。デリダもケラーも、その程度までは「真面目」に書いている。本論集が、デリダの議論を引き受けたうえで、デリダに抗いつつ拘り考えていきたいのは、まさにこの「真面目さ」、すなわちオースチンが「不真面目」とみなした、ときに芝居じみた振る舞いの「真面目さ」である。

もちろん、デリダに抗うからといって主体の現前に回帰したり、また別の仕方では記号や諸活動の意味や作用の確定性や、文脈の動かし難さを主張したりしようとするのではない（たとえば唯物論的歴史観を想起せよ）。したがって、ここでいう「真面目さ」も主体に帰属するものというよりは、私たちがさまざまな活動のなかで、社会的、実践的に要請し当てにしているものに他ならない。それはいわば、文脈が生み出し、文脈に備わる「真面目さ」である。たしかに、ときとして主体帰属が問題となるときもあろう。しかし、ちょうどデリダの真意を探らずとも、デリダがその構成に参加したそこに置かれているところの哲学的議論の文脈が、デリダの「真面目さ」を当てにさせるように、私たちはある一定の条件下で——学問的応答関係や市場取引、文学者や医療従事者の活動、宗教者の発言やヘイト・スピーカーの振る舞い、映像作品や持続可能性農業のあり方、その他諸々を取りまき、また構成する多様な文脈で——活動の意図を主体に帰属させるだろう。しかしその主体帰属が、どんな「実践的な目的」[Garfinkel 1967: vii, 8] にのっとった文脈設定によって、どのように社会的に達成・承認されるのかを探る点で、主体帰属の問題もまた文脈化をめぐる問いに包摂されることになる。

ここで、急いで付け加えておかなければならないのは、いましがたの「『実践的な目的』にのっとった文脈設定」（以下、「実践的な文脈化」あるいは単に「文脈化」とする）との名づけが、改めて文脈なるものを所与的な実体へ送り返すことを「意図して」いない、ということである。オースチンが、言語行為が適切に遂行されるための条件として、発話者の意図と並んで、あるいはそれ以上に重視していたのは、「慣習的手続きの存在」だった [オースチン: 26-7, 197; 比較参照として大河内論文、井頭論文]。ところが、慣習の語は、いやがおうにも文脈の所与性や実体性を想起させてしまう [比較参照として野家1993: 293-6]。ここであえて実践的な文脈化の語を用いるのは、文脈設定が、たえざる流動化にさらされつつ達成され（なおされ）る性質を有している点に留意したいからだ。先の聖職者の宣言の例に明らかのように、文脈を構成する要素は、無限に数え上げ可能であり、行為としての宣言の力をいつまでも宙づりにしつづけるだろう。しかし、ひとたび自分が婚姻儀礼の当事者や参加者になったらならばどうだろうか。誰もが婚姻が適切に成立したことを確定するために（また逆に、不成立だったことを確定するために）、後の上書き可能性を承知しつつも、とりあえずの文脈化を試みるに違いない [井頭論文参照]。注意したいのは、それが宙づり状態の眩暈への恐れや、相対主義の徹底がもたらす不可知論を避けるといった、普遍化可能な理由からではない点である [比較参照として Scharfstein 1989]。むしろ理由は、儀礼の実践的な目的が婚姻を成立させることにあること、そのことこそにある。とはいえ、このとき立ち現れた文脈はいつでも流動化に晒されるだろう。それはただ、いままで知られていなかった文脈の要素が、突如として新たに登場するからだけではない。参加者（事物や制度を含む）の誰もが多かれ少なかれその一端を担う文脈の諸要素（発話・活動・振舞い）が、いかようにも再解釈可能であり、それが文脈の性質に影響を与え、さらにそれがまた個々の要素の解釈に影響を与える、いわゆる「解釈学的循環」をもたらすからでもある。さらに悪いことに、私たちの活動のうちの少なくとも一定の部分は、儀礼にせよそうでないにせよ、活動の実践的目的に関する明確な合意をえぬままに協働的に展開してしまっている（この共同研究はまさにそのよ

うなものとして始まった!)。多様な当事者たちの、目的の読み込みのそれぞれが、ふたたび文脈を構成する要素になってしまうのである。

かように文脈は、つねに生成途上にある。しかし、ここで繰り返し強調しておきたいのは、文脈が絶えざる脱文脈化—再文脈化の流れのなかで暫定的、部分的にたち現れるにすぎないのだとしても、なお私たちは実践的な文脈を必要とし、事実さまざまに文脈化を試みているらしいことである。けれども私たちは、この実践的な文脈化についてどの程度よく知っているのだろうか。これが本序論の冒頭で筆者が投げかけた問いだった。たしかに私たちは、たとえば職業的な文脈や生存に直接かかわる文脈について、良く分ったつもりになっている。デリダが自身の著作の無際限の誤読を望んでいない「ように見え」たり、原稿料の受け取りを含めて市場でのやりとりでは「贖金」をつかまされない方が「良いはずだ」と考えたりするのは、そのためだろう。しかし、分かったつもりになっている文脈に対してでさえ、用心深く「方法論的無教養主義」[Gell 1992: 42] の立場をとるほうが、少なくとも私たちが今ここで設定しようとしている文脈においては、実りが多いはずだ。実際、無数のデリダ読みたちが門外漢には測り知れない秘儀的な様式と美学で、デリダ=サル論争を再／文脈化しているだろうことは、容易に想像できる。しかし、いま私は無教養にもそれを知らない。また、政府発行通貨で支払いをうけるのではなく、貝貨やビット・コインなど「貨幣らしきもの」を受け取る方が、ある特定の状況下では妥当なことは充分ありえることである。しかし、その詳細について私たちの多くは知らない。「真面目さ」が主体の現前という錨から解き放たれたのだとすれば、それが様々に実践的な目的で、多様な様式と美学で編みあげられる文脈に依存しているらしいと想像するのは、ごく当然のことのように思われる。そして、そもそもの脱構築、あらゆる脱文脈化の歓喜、興奮、苦悶もまた、私たちの良く知らぬ路地裏で地道かつ多様に繰り返される文脈化というこの「真面目」な仕事に、むしろ依存しているらしいと想像するのも、また当然のことと思われるのだ。しかも文脈は、あらゆるフェティッシュが破壊的な毀損を受けることでかえってなお一層の輝きを放つように [Taussig 1999]、脱文脈化を被ることで自らをより盤石にする可能性さえ潜在させているのかもしれないのである。

実践的な文脈の多様なあわれの仔細に目を凝らし、それを文脈化と脱文脈化の闘ぎ合いのなかに捉えること。これが、専門を異にする本論集の執筆者の各々に、筆者がいわば最低限の「神話的暴力」[ベンヤミン1994] として課した共通の課題であり、また分野を超えた対話の実践的な目的である。この目的設定が、どのような個別成果を生み出すのか、また逆にそのひとつずつがこの目的設定にどのように揺さぶりをかけるのかの詳細については、本論集に収められた各論考を参照していただきたい。次節では、本論集に収められた各論考を簡単に紹介し、それら相互がもつ潜在的、顕在的な関係を浮かび上げることで本特集全体の文脈を提示しておきたい。

Ⅲ 複数の脱／文脈化：本論集が編みあげる文脈

丹羽論文「難しく危険なコミュニケーション」は、ネパールのプロテスタントのあいだにみられる「不信の言説」が、いかに強固にコミュニケーション空間を文脈化していくかを仔細に分析する。丹羽はニクラス・ルーマンを援用して、コミュニケーションの複雑性の縮減のために、人は「信頼」と「不信」のどちらか一方を戦略として選び出さなければならないという。しかしひ

とたび「不信」が選り取られると、それは選択主体を「不信」の言説に縛りつけ続けるつよい力を発揮する。特定のカーストが「ずる賢い」とされると、その「ずる賢さを捨てた」との個別的な言明も、発話者の「ずる賢さ」のあらわれであると解釈されるのである。また「不信の言説」が広く流通している状況下では、人々は騙されないとするあまり他者に関する情報の探索を断念し、同時に疑われたくないとの思いから自分の情報を提供するのを控えるようになる。こうして「不信の言説」を揺るがす可能性をもった発話や行為がコミュニケーションの場面から首尾よく摘み取られ、「不信の言説」の文脈はみずからをより一層強固なものにしていく。丹羽がネパールのプロテスタントの発話や行為を追うことで見事に浮かびあげるのは、個別的な「不信の言説」と「不信の言説」が広く流通する文脈とが、互いに他方を強化する自己生成的、自己強化的性質を有していることだった。前節で示唆したように、あらゆる脱文脈化が文脈化の力に依存しているのだとすれば、本論文は本特集の冒頭論文にふさわしいといえよう。また、「不信」をめぐる考察は、先に触れた「不真面目」をめぐる諍いに新たな光を投げかけるに違いない。ある特定の文脈が可変的でありながらも一定の安定性や拘束力を発揮する点については、大河内論文が論及する「歴史的合理性」、井頭論文における「常識的世界像」、さらに井川論文が脱文脈化を試みる「英文学史」と反響しあっている。さらに、特定の発話とその発話がおかれた文脈の相互生成の観点からは、次の前田論文と緊密なかかわりを有している。

前田論文『社会学的記述』再考は、エスノメソドロロジーの立場から脱／文脈化を捉えなおす。社会学がとすれば人々の個別的な活動とは別の水準に文脈を見いだしていくのとは異なり、エスノメソドロロジーは、人々が日常的な概念を用いながら自らの活動を記述することで文脈を編成していることに着目する。しかも人々は、ただ単に文脈を編成するだけでなく、(たとえばデリダのような)外部の観察者同様に、編成に関する方法論をもっている。そのうえで前田は、文脈を編成する記述の複数性の問題に、二つの方向から取り組む。一つは、ギルバート・ライルがいう「薄い記述／厚い記述」の区別の問題系である。この区別は、必ずしも学問的記述の指針を提供しているのではなく、むしろ行為の理解の問題を記述間の問題、記述をささえる文脈間の問題として捉えようとするものだった。そしてこの「薄い」記述と「厚い」記述が、日常的な実践においても生じうる現象であること、さらに両者が必ずしも矛盾するものでないことが、医療従事者のやり取りを通じて示される。また一つは、イアン・ハッキングがとりあげた、新しい概念のもとでなされる過去の遡及的記述の問題系である。過去の記述と矛盾する新しい記述が現れたときに、文脈間の関係をどう捉えたら良いのだろうか。前田は、遺伝性疾患を生きる当事者たちの語りを分析して、新しい知識によってもたらされた記述と折り合いをつけていくための、患者たちの方法論を明らかにする。記述と文脈の複数性をめぐる議論は、浜田論文の「複数の統治の干渉」、井頭論文の「複数の物語り」、大河内論文の「再意味づけ」と比較すると実りが多いだろう。また、記述と文脈の相互反映的(リフレクシブ)な関係については、丹羽論文のほか、深澤論文の「再帰」や「再文脈化」の概念、大杉論文の「二次サイバネティクス」をめぐる議論と密接な関連をもつ。さらに前田がとりあげた「遡及的記述」は、井川論文が学問営為としてまさに実演してみせるところであり、一方は他方に、それ自体が発するのとはまた違った光を投げかけるに違いない。

井川論文「リアリズムとモダニズム」は、アーノルド・ベネットと同時代の小説家たちが置かれていた物質的文脈と、ジャーナリズムと学術研究のあいだの交渉とを克明に追跡することで、

正典化された「英文学史」を脱文脈化する。英文学史にとって1922年は特別な年とされる。それは同年に、T. S. エリオット、ヴァージニア・ウルフ、ジェイズム・ジョイスの作品がそろって出版され、後にモダニズムと呼ばれることになる潮流を形づくったからだった。一世代上にあたるベネットの作品がリアリズム小説とみなされ英文学史の周縁に追いやられてきたのに対し、彼らの作品は有機的統一性を有したテキストとみなされ英文学研究の精緻な吟味の対象となってきた。ところが、批評や小説発表の媒体となった雑誌や新聞、小説家たちをとりまく経済状況、公教育の普及と読者層のひろがり振り返ると、リアリストとモダニストが同じ物質的文脈に置かれていたばかりか、作家兼批評家としてすでに名声を手にしていたベネットが、文学作品の「産婆」として若い世代に手を差し伸べることをさえていたことが浮かび上がる。しかしウルフらは、ベネットの新しい試みを意図的に無視し、前世代との断絶をことさらに強調しようとした。英文学研究もまた、ベネットらの批評ジャーナリズムから文学批評を奪還し、大学を拠点とした対抗的な「少数派文化」の創始を目指していた。井川は、この文脈化の力学が、英文学史や今日の大学のシラバスにまで強い影響力を与えていることを明るみに出す。その力強さは、丹羽論文が析出する文脈拘束力と比較しうるものである。遡及的記述との関連では、前田が新しい文脈による過去の読み替えをとりあげたのに対し、井川論文はかつてあった文脈による現在の読み替え可能性を提起しているといえる。また、大杉論文がとりあげる人類学が英文学研究と同じ1922年に自らの誕生を位置付け、ともに学の対象に有機的統一性を投射していたことには、単なる偶然とは思えない一致が見いだせる。さらに、英文学研究を軽蔑するベネットが文学経験の根底に「奇跡」や「エクスタシー」を見いだしていたことは、深澤論文がとりあげるシュライアマハーが宗教経験の根本に伝達することも育成することもできない「宇宙の直観」を据えていたことと、確かに共鳴しあっている。

深澤論文「宗教経験論と脱文脈化」は、近代宗教経験論の嚆矢をなしたフリードリヒ・シュライアマハーの『宗教について』[1899]をとりあげ、そこにみられるキリスト教の文脈化、脱文脈化、再文脈化の闘ぎ合いを捉える。「経験からの論証」を語る神秘神学が、伝統のなかに埋め込まれ、その意味で前文脈的であったキリスト教を文脈化したのに対し、宗教研究はキリスト教の教義や教会の権威の自明性が失われたときに登場する。宗教研究はキリスト教を宗教の一事例と位置付け、同時に複数の信念システムを普遍的な宗教概念のもとに比較可能にした点で、それ自体に脱文脈化の契機を内包していた。とくにシュライアマハーの宗教経験論は、既存の正統教義とはまったく異なる宗教理解をしめして物議を醸した。彼は、付随する異質な部分から宗教を解放するために、宗教の根源を「人間の内面性」とくに「根本直観」に求める。その直観とは「宇宙の直観」であり、そこにおいて個々人は「有限性のまっただ中であって無限なるものと一体になり、瞬間のなかで永遠となる」のだという。こうしたシュライアマハーの宗教経験理解は、たしかに諸宗教を包摂する一元的な理解をもたらす点で、脱文脈化のベクトルをもっている。しかし深澤は、それが同時に、非キリスト教的な知と実践のシステムの比重が増大するなかでキリスト教をメタ宗教として再解釈し、正当化する、再文脈化のベクトルをも有していたことを明らかにする。宗教研究は、人類学、社会学、英文学研究、哲学・思想などと同様に、対象を学知の視野のもとに文脈化する点で共通している。しかし深澤論文が明らかにする文脈化・脱文脈化・再文脈化の動態は、学知がむしろ前田論文がとりあげる日常的方法論の循環的ありかたに類似していることを示している。また、個と神、有限と無限の関係については、武村論文がとりあげる言語

と神 = LOGOS の関係、大杉論文がとりあげる持続可能農業の実験と興味深い重なり合いをみせている。そして、深澤が焦点化した脱／文脈化の動態は、浜田論文においてまた違った様相でその姿を現している。

浜田論文「書き換えの干渉」は、ガーナ南部における結核をとりまく状況をとりあげて、フォーコーの統治論を発展的に援用しながら、行為を方向づける社会的文脈が複数のアクターによる文脈編成の干渉のなかで生じていることを明らかにする。結核をめぐるもっとも大規模に環境の書き換えを行っているのは政府が主導する結核対策プロジェクトだった。それは、薬剤やドキュメント、看護師や予算を配置することで、結核菌と患者の行為を統治しようとする。他方で、結核菌が薬剤に対する耐性を身につけて生存をはかるように、患者やその家族もそれぞれが置かれている社会的文脈を書き換えながらより良い生を模索している。浜田が描き出すのは、結核をめぐる環境が、結核対策プロジェクト、結核、結核患者という複数のアクターによって持続的に書き換えられ続けているその様相である。同時に浜田は、そのようにして編みあげられつづける文脈を、人類学者が書くという営みにおいてする文脈編成の課題と重ね合わせる。ちょうどミステリにおいて、文脈の探索が文脈の編成と密接に結び付き、推論の積み重ねが「正しい」事実の再構成へと帰着するように、浜田はアクターたちの文脈編成を辿りながら人類学が文脈を編成する流れを読者に追体験させるのである。浜田が浮かびあげる干渉は、深澤論文がとりあげる動態がひとりの宗教学者の思惟の内にあるのみならず社会的文脈で繰り広げられる闘ぎ合いを映しだしているのだろうとの推論を促し、一方で井川論文が実演してみせる脱文脈化がどのような帰結を英文学／研究にもたらすのかについて想像をめぐらせるのを促すだろう。また、浜田による対象と学知の平行性の提示は、前田論文のエスノメソドロジーが日常の微細なやり取りに接近することで達成しようとすることを、また違った形で実演させてみせている。そして、結核対策プロジェクトに完全に統御されることのない患者たちの姿は、大河内論文における中傷語の「再意味づけ」の問題系へと直接に連なっていく。

大河内論文「政治としての発話行為」は、ユルゲン・ハーバーマス、ロバート・ブランダム、ジュディス・バトラーの規範理論を批判的に検討することで、言語行為における規範性の文脈主義的理解を提示する。カント主義の継承者ハーバーマスは、生活世界における私たちの言語使用を再構成することで、現代の合理化された社会において疑似超越論的な普遍的妥当性を有する規範を導きだした。対照的にブランドムは、同じ語用論から出発しつつも規範を過去の言語使用の蓄積として判例法的に理解し、規範の合理性を歴史的な文脈のうちに捉える「歴史的合理性」の概念を提出する。それが含意するのは、私たちが過去の規範を解釈し、その解釈を通じてこれまでの文脈とは異なった新たな解釈の文脈をつくりあげている過程であった。大河内は、このブランドムの「進行中の解明過程」を、バトラーのヘイトスピーチをめぐる分析と接続し、彼女が「再意味づけ」と呼ぶ対抗的な「戦略」を再検討する。バトラーがとりあげるヘイトスピーチも特定の語の使用の歴史的沈殿を背後にかかえているが、同時に、私たちはその語を使用するたびに、語の意味を上書きし未来の使用を規定する文脈を構成しているはずである。そこから大河内は、バトラーが「再意味づけ」に見出す対抗言説の存立可能性が、ヘイトスピーチの存立可能性と同じ過程のうちに見いだせること、また彼女のいう「行為者性」も被規定性のなかで初めて立ち現れることを明らかにする。大河内の歴史性をめぐる議論は、浜田論文の文脈の書き換えが常に「既存の配置」の改編として行われることと明確に重なり合っている。また、丹羽論文との関連では、「不

信の言説」の盤石たる安定性が崩される契機が、その安定性を可能にしているのと同じ過程のうちにあるのかもしれないことに、私たちの関心を向けさせるのかもしれない。普遍妥当性をめぐっては、異なる角度から個別と普遍の関係について論じた、深澤論文、武村論文、大杉論文と比較することが有益だろう。さらに、「妥当性基準」をめぐって展開する井頭論文とは、通時的側面と共時的側面のどちらに重きを置くかの違いはあるものの、いくつもの重要な論点を共有している。

井頭論文「物語り論的アプローチによる自由意思擁護論の再検討」は、自由意思と決定論をめぐる哲学的な問題に対する、物語り論的アプローチによる解決を検討し、複数の物語り＝文脈の併存を可能にする妥当性条件を提示する。野家啓一は、脳生理学などによる決定論から自由意思を擁護するために物語り論を展開した。野家から物語り論を継承する井頭は、しかし、野家の議論の致命的問題点を析出する。すなわち、ある行為を必然化する原因の同定不可能性は、当該行為が必然化されていないことを示したことはないという点である。そのうえで井頭は、物理系状態と諸行為のトークン同一性を認めつつも、物理系状態に帰される様相的特徴と他の物語りに属する事象とのあいだの横断性を拒否し、なおかつ物語り論が極端な相対主義や共約不可能性テーゼに陥らないようにする方途を模索する。相対主義の危険は野家自身が認識していたことであり、彼は貫物語り的な境界条件を非言語的な「直接的な体験」に求めていた。井頭はこの直接体験を「生活形式に根付いた言説の集合体」と読み換えて、この「常識的世界像」との整合性が、複数の物語りが互いに横断性を有しなくとも併存しうる妥当性条件であることを示す。大河内論文が文脈の通時的可変性を擁護しつつも、その変化に制約をあたえる重しを歴史的蓄積に見いだしたのに対し、井頭論文が示すのは複数の文脈＝物語りがその非横断性のままに「常識」という基盤に錨をおろしていることだったと言えよう。この多と一の関係をめぐる理解は、丹羽論文の「不信」、井川論文の「英文学」、深澤論文の「宗教」、浜田論文の「統治」、武村論文の「言語」、大杉論文の「革命」といった概念の外延と内包を、改めて問い直すきっかけを与えるだろう。それはまた、個別と（暫定的／疑似）普遍⁽¹⁾の問題系と絡み、改めて暫定性や疑似性をめぐる形而上学的、形而下的な思考に私たちを誘うに違いない。つづく武村論文は、むしろ「常識」を覆す個別から、普遍者たる U/LOGOS を仰ぎみる。

武村論文「ULOGOS」は、ヴァルター・ベンヤミンの「言語一般と人間の言語」の冒頭部分の精読を通じて、「映像」とそれを「見る」行為の存在論を探求する。武村がまず着目するのは、あらゆる「映像」はそれ自身に対してしか「実物大」であることができないことだった。たとえば「私が見た夕日の像」をスクリーンに「実物大」で投影することは、「実物大」を保証する「ものさし」がどこにも存在しないがゆえに、原理的に不可能である。ベンヤミンは、その論考のなかで「言語の最も奥深い本質」を「精神的内容の伝達をめざす原理」としていた。この場合言語とは、人間の言語に限定されない、自己自身を伝達するあらゆるものを指す。さらに彼は「言語において自己を伝達するものは、外側から限定されたり量り比べられたりすることはできない」としていた。だから言語は、それ「によって」伝達するのではなく、それ「において」伝達するのだという。武村はここから、映像もまた目に映ったその姿「において」伝達されるという。武村は、この能動にして受動であるようなあわいに「見る」という行為を据えなおし、その行為の能動的側面つまり「見る」出力を見いだす。では私が「見る」出力、人間の言語には翻訳できないその出力は、誰に何を伝達するのか。武村は、ベンヤミンの「人間の精神的本質は自己を神に

伝達する」という言葉をうけて、神＝言語＝ロゴスに対してウ（否）・ロゴスの名において自身の精神的本質を伝達すると結論する。「夕日を見る」といういたって平凡な経験が、丹羽論文や大河内論文、より明示的には井頭論文が注意深く退ける共約不可能性を呈していることは、見解の違いを越えて私たちが深く思考し続けることを促している。映像経験の個性が、容易には理解しがたいかたちで神＝普遍に伝達されることについては、深澤論文がとりあげる「宗教経験」と宇宙、有限と無限をめぐる問いと比較すると実り多いことだろう。「見る」出力との関連では、記述と記述対象文脈の相互反映的關係を論じた前田論文との比較が有益に違いない。また、この最後の二つの論点を含めて、武村論文と深く共鳴しあうのが、つづく大杉論文である。

大杉論文『『キューバ革命の緑化』とマリノフスキーの子供たち』は、ブラニスラウ・マリノフスキーの「文脈化革命」と、キューバ革命の現代の担い手たちが試みる「革命の緑化」を比較し、双方の文脈編成の特徴を浮かびあげる。マリノフスキーは、研究対象の人々を「彼ら」自身の文脈に据えることで、人類学のあらたな学問的文脈をつくりあげた。この革命は多様なかたちで反復され、今日のアクター・ネットワーク理論（ANT）に至っている。ところが、ANTの視野からは、キューバにおける「革命の緑化」は適切には理解できない。それは、ANTがあらゆる活動の背後にあるブラックボックスを「開ける」ことを学問的な使命としているのに対し、「革命の緑化」の試みがブラックボックスを「閉じたまま」にしようとするからである。それに対し大杉は、彼らの試みを二次サイバネティクスにおけるブラックボックスの扱いと比較し、ブラックボックス化が「持続可能性」や「エコロジー」という直接触れることも計測することもできない事象を具体的に組み組み可能なものに変えているのだとの理解を示す。またそれは、ポスト・ユートピアの時代を生きる文脈を括りだし、なおそのうえで個別を普遍へと接続する彼らの作法に不可欠なものだった。そして大杉は、この彼らの作法が、マリノフスキー以降の学問的文脈、すなわち「彼ら」と「私たち」のあいだの距離を設定したうえで、「彼ら」の個別具体から「人間の研究」という普遍知へ向かおうとする運動に、新たな自己理解をもたらすと結論する。大杉論文は、対象文脈と学問的文脈の關係について論じた、前田論文、浜田論文と比較可能だろう。とくに井川論文とは、先に触れた学問の歴史的転換点をめぐる見逃しがたい一致がみられるが、同時にその転換点をどう評価するかで大きく異なっている。また先の（暫定的／疑似）普遍、今ここの常識とみるか未来の彼方に透かしみるかという点で、井頭論文と興味深い相違を示していることも見逃せない。そして何より、方法論も対象も全く異なる武村論文と、計測不可能性、個別と普遍、観察対象への参与の三点で同じ文脈の圏内にあることに、素直な驚きを禁じえない。

IV 文脈化という奇跡

なるほど文脈は、私たちの日常にごく当たり前のように横たわっているのだろう。しかし、本序論を書き連ねていて改めて気づかされるのは、文脈が編成されそこに存在するということが、どんな脱文脈化の曲芸よりよほど奇跡の名に値するのではないかということである。上に記した「驚き」は、けっして驚きを「演じて」みせたのではない。いやこの際、私の「内面」を掘り散らかすよりも、いま読者の手元にある文脈そのものを参照していただきたい。私たちの共同研究は、巻頭言にあげた短い文章を共有したきり、まさに「活動の実践的目的に関する明確な合意をえぬままに協働的に展開」してしまったというのが実情に近い。参照文献を共有することも最小

限であったし、毎回長時間に及んだ議論で前景化していたのも、個々の見解の相違や、学問的伝統ごとの叙述作法や論証手続きの違い、何を「知」と見なすかをめぐる価値の多元性だった。当初予定していた草稿の読みあわせと論文間での相互言及、原稿書きあげ後の鼎談も、もっぱら編者の怠惰と無能力により実現せず終わった。それにもかかわらず、各論文のあいだに前節で記したような緊密な相互関係が認められ、見解や立場の相違さえもが興味深い探求の文脈らしきものを編みあげていることには、やはり奇跡という表現がふさわしいように思えるのである。

本論集が、数多の「文脈論」とどのように違う文脈を編成しえたのかは分からない。私たちはそうした「文脈論」をあえて参照せず、それぞれが自身の学問的文脈と個別研究から発想しえる何事かを提起するという方法をとった。優劣はともかく（それは読者が決めることである）、ひとりの著者が文脈をめぐる思考とその実例の数々を収集し、そのそれぞれに見解を述べていくというのは、違った産物になったことだけは確かだろう。もちろん、どんな文脈も脆く崩れ去り、あるいは融通無碍に移ろいゆく運命にあるのだろう。だから読者諸氏にも、その読書行為あるいはまた自らの学的営みにおいて、本論集が編みあげた文脈らしきものを多方向に脱文脈化していくことにせいぜい耽っていただきたい。願わくは、その数々の脱文脈化が、私たちの文脈の「真面目さ」を再発掘し、そこに一層の確かさを付与せんことを。

注

- (1) この「(暫定的／疑似) 普遍」の語は、井頭氏の「常識的世界像」を大杉の責任で翻訳したものであり、氏の同意を得たものではないことを、ここに明記しておきたい。他の論文との接続可能性を高めるためというのが、唯一の翻訳理由である。

参考文献

凡例 必要がある場合にのみ、原著出版年を [] で記した。

オースチン、ジョン

1978『言葉と行為』坂本百大訳、大修館書店。

ベンヤミン、ヴァルター

1994『暴力批判論』野村修訳、岩波文庫。

カラー、ジョナサン

2009『ディコンストラクション』富山太佳夫、降島正司訳、岩波書店。

Derrida, Jacques

1979 Living On · Border Lines. In *Deconstruction and Criticism*. Harold Bloom (ed.), pp. 75-176. Routledge & Kegan Paul.

デリダ、ジャック

2002 [1972]「署名 出来事 コンテキスト」『有限責任会社』高橋哲哉、増田一夫、宮崎裕助訳、pp. 7-56、法政大学出版会。

2002 [1977]「有限責任会社 abc・・・」『有限責任会社』高橋哲哉、増田一夫、宮崎裕助訳、pp. 65-235、法政大学出版会。

2002 [1990]『有限責任会社』高橋哲哉、増田一夫、宮崎裕助訳、法政大学出版会。

Garfinkel, Harold

- 1967 *Studies in Ethnomethodology*. Polity Press.
- Gell Alfred
- 1992 The Technology of Enchantment and the Enchantment of Technology. In *Anthropology, Art and Aesthetics*. Jeremy Coote and Anthony Shelton (eds.), pp. 40-63, Clarendon Press.
- ゴッフマン、アーヴィング
- 1986 『儀礼としての相互行為 対面行動の社会学』 広瀬英彦、安江孝司訳、法政大学出版会。
- 野家啓一
- 1993 『言語行為の現象学』 勁草書房。
- Scharfstein, Ben-Ami
- 1989 *The Dilemma of Context*. New York University Press.
- サール、ジョン
- 1988 [1977] 「差異ふたたび デリダへの反論」 土屋俊訳、『現代思想』 五月臨時増刊号、pp. 72-83。
- 高橋哲哉
- 1998 『現代思想の冒険者たち28 デリダ 脱構築』 講談社。
- Taussig, Michael
- 1999 *Defacement: Public Secrecy and the Labor of the Negative*. Stanford University Press.

(一橋大学大学院社会学研究科教授)